

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## むつ市方言の格と情報構造

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-08-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002998">https://doi.org/10.15084/00002998</a>

# むつ市方言の格と情報構造

中川 奈津子<sup>1</sup>

## 1 はじめに

本稿では、2018年8月30～31日に行われたむつ市方言の合同調査をもとに、むつ市方言の格と情報構造に関してわかったことをまとめた<sup>2</sup>。調査は、話者に日本語の文章を彼らの方言に訳してもらうことにより進められた。主語、目的語、情報構造についての調査票があり、それぞれ別々の話者から方言を聞き取ったが、補足的に複数の話者から聞き取っている場合もある。聞き取った話者が異なる場合はその旨を明記する。例文は最もスムーズに方言で発話されているものを採用した。スムーズな発話が複数ある場合はそのすべてを採用した。

### 1.1 先行研究

むつ市の属する下北の格と情報構造に関する先行研究は筆者の知る限り、此島（1967）で格助詞とハに相当するものについて言及があり、平山ほか（2003）も下北方言を含む青森県全体について概観した中に格標示の記述が多少ある。青森県全域にまで視野を広げると、此島（1982）などがある。いずれの研究も、下北方言を含む青森県の方言では、主格、対格、主題標識を基本的に欠いており、主格あるいは主題標識として「名詞が半拍分延びた『ァ』」（平山ほか 2003: 33）、「いわゆる体言を強調する場合には『ゴド・トバ・バ』が現れる」（op.cit.: 34）と報告されている。いずれの文献にも例文までは載っておらず、それぞれの標識の具体的な使い方も詳しくは不明である。本論文ではむつ市方言のそれぞれの格標識の使い方について詳しく見ていく。

### 1.2 アウトライン

本稿は以下のように議論をすすめる。まず2節で主格標識について、次に3節で対格標識について、最後に4節で情報構造に関する標識について報告する。5節で簡単に議論をまとめ、残された課題について述べる。

## 2 主格標識

ここでは、他動詞文における2つの項のうち動作主性の高い方（A）、自動詞文・形容詞文・名詞述語文における唯一項（S）のことをまとめて主格と呼び、主格を表す標識を主格標識と呼ぶ。現代日本語共通語では、ガが典型的な主格標識である。

<sup>1</sup> なかがわ なつこ：国立国語研究所・特任助教（nakagawanatuko@gmail.com）

<sup>2</sup> 長時間の調査に協力してくださった話者の方々に感謝する。格と情報構造と一緒に調査したのは、狩俣繁久氏、ウェイン・ローレンス氏、ケナン・セリック氏、山上紗季氏であり、この成果は彼らの調査方法の工夫に依るところもある。ここに記して感謝したい。

## 2.1 無標識、[a]、[ŋa] の分布

1.1 節で述べたとおり、先行研究では下北方言（あるいはこれを含んだ青森の方言）は主格標識を基本的に欠いており、たまに「ア」が現れると報告されている。しかし今回の調査では共通語のガに当たる [ŋa] が、特に主語を調査した話者においては、相当の割合で現れた。表 1 に示したように、33 項目中 19 項目で [ŋa] が現れることができ、無標識 ([ $\phi$ ] で示した<sup>3</sup>) で発話されたのは 14 項目、先行研究で「ア」と報告されているもの（本稿では [a] と表記）は 3 例しか現れなかった<sup>4</sup>。

表 1 主格標識の現れ方

$\phi$	$\phi/a$	$\phi/\eta a$	$a/\eta a$	$\eta a$	合計
11	2	1	1	17	32

東京方言では、ガは非動作主というよりは動作主的な名詞を標示することが報告されているが（影山 1993; Nakagawa 2013; 2016; 下地 2019）、むつ市方言では [ŋa] のほうが動作主的な名詞を標示しやすいという傾向は見つからなかった。表 2 に示すとおり、自動詞主格名詞のうち、動作主、非動作主的な名詞標識を調べることを目的とした例文において [ŋa, a,  $\phi$ ] の分布を見ると、[ $\phi$ ] も [ŋa] も動作主、非動作主的な名詞の両方を表示でき、どちらかが非文法的になることはないようだ<sup>5</sup>。

表 2 主格標識と動作主性

	動作主的	非動作主的	合計
$\phi$	3	3	6
$\phi/a$	1	0	1
$\phi/\eta a$	0	0	0
$a/\eta a$	0	0	0
$\eta a$	1	2	3
合計	5	5	10

例 (1) では、動詞「泳いでいる」が意志的であるため主格名詞「太郎」は動作主になり、(2) では「溺れて死んだ」が非意思的であるため主格名詞は非動作主になる。両方の例文で主格 [taro:] “太郎”は無標識で現れている。[] で囲まれた数字は主語調査票の例文番号を表している。

<sup>3</sup> ここでは説明の便宜のために無標識（名詞の標識を欠いていること）を [ $\phi$ ] を用いて示すが、ゼロ助詞の存在を前提としているものではない。

<sup>4</sup> 1 人の話者から複数の例文が得られた、あるいは複数の話者から例文を得られ、かつ例文間で名詞標識の使い方が違った場合のみ x/y のようにスラッシュを用いて表示している。すべての項目において複数の例文が得られたわけではないため、単一の標識が使われている例文の中にも他の標識が用いられるものもあると考えられる。

<sup>5</sup> [a] に関しては 1 例しかないので言及しない。

- (1) taro:= $\phi$  ig $\epsilon$ =de $\epsilon$  ojoi<sup>n</sup>d $\epsilon$ ru do [17]  
太郎 池=で 泳いでる よ

(動作主的 S)

- (2) taro:= $\phi$  ig $\epsilon$ =de $\epsilon$  obore $\epsilon$ de $\epsilon$  sinda do [18]  
太郎 池=で 溺れて 死んだ よ

(非動作主的 S)

以下の例 (3)、(4) は同じ例文「(あそこに) 先生が立っていた」を別の話者に訳してもらったものである。(3) の主格 [sense] “先生” は [ŋa]、(4) は無標識で標示されている。

- (3) are: sense=**ŋa** tatte ita jo [2]  
間投 先生=が 立って いた よ

(S)

- (4) a $\dot{s}$ iko=sa sense= $\phi$  tat:ea dza [2]  
あそこ=に 先生 立っている よ

(S)

また、(5) のように、他動詞の動作主性の高い項 (A) も無標識で現れることができる。

- (5) are: sense= $\phi$  tsigue hagond $\epsilon$  ida [1]  
間投 先生 机 運んで いた

(A)

以上の事実と先行研究の報告を考え合わせると、先行研究の調査年代において、むつ市方言は共通語のガに相当する主格標識 [ŋa] を持たなかったと考えられるが、近年は共通語の影響で [ŋa] を主格標識として用いても良いが無標識でも良い、ということが言える。東京方言を基礎とした共通語とは異なり、動作主性や、後に述べる焦点性は [ŋa] の現れる条件ではないように思われる。この方言本来の主格標識は [a] であり、[ŋa] あるいは主題標識の [wa] あるいはこの両方が変化したものと思われる。[a] の数が少ないので、今回の調査から [a] の出現条件を特定するのは困難である。今後の課題とする。

特に主格の例文を主に聞き取った話者が [ŋa] を多く発話していた。話者が女性であること<sup>6</sup>、合同調査における初めてのセッションであることなど、様々な要因によって [ŋa] の使用が増えた可能性がある。

## 2.2 [a] は主格標識なのか

上述したとおり、主に主格を標示する [a] は、[ŋa]、[wa]、あるいはこの両方から変化して [a] になったと考えられる。いわゆるハガ構文 (例：太郎は小さい音が聞こえる [目的語調査票 5]、息子はお金がない [同 12]) では、共通語のハに相当する名詞に [a] が標示されるこ

<sup>6</sup> 例えば熊谷 (2018) において特に女性が方言を使いにくい社会的文脈が論じられている。

とがあるが (6)、ガに相当する名詞にも [a] が後続できる (7)。

- (6) we=no i=no **taro=a** teisaj **odo** nan=de=mo kikoerun da-t:re jo  
 うち=の 家=の 太郎=が 小さい 音 何=で=も 聞こえるん だ-って よ  
 ([目的語調査票 5])

- (7) ogaci **oto=a** kikeru na: [同 5]  
 おかしい 音=が 聞こえる なあ

また、(8) のように、すべて無標識でも現れることができる<sup>7</sup>。

- (8) udzi=no **baba** **eiŋo** degiruw zi dza [同 7]  
 うち=の おばあさん 英語 できる らしい よ

さらに、(9) のように、対格名詞にも [a] が後続できる。

- (9) kono **kafi=a** wa katte kija [同 61]  
 この 菓子=は 私 買って 来た  
 ‘(この菓子はお前が買ってきたのか?) この菓子は私が買ってきた。’

ただしこの用法はかなり限られているようで、通常、いわゆる主題化の操作を行って対格名詞を文頭に移動するときは [ba] が用いられるようで (3 節参照)、同様の例文に対して対格に [ba] を後続させていることもある。対格を標示する [a] の例はこの 1 例しかないので一般化が困難であるが、もしかしたら対比的な対格名詞に [a] が後続するのかもしれない。これに関してはさらなる調査が必要である。

助詞 [a] は共通語のハにもガにも相当する特性を持っており、主題化された (あるいは対比的な) 対格名詞も [a] で標示されることがまれにある。[a] は主格標識であるとは言いきれないが、今回の調査ではほとんど主格を標示していた。

### 3 対格標識

本節では、他動詞文における 2 つの項のうち動作主性の低い方 (P) を対格名詞と呼び、対格名詞の標識を議論する。表 3 において例文中に現れた対格標識の分布をまとめた。

表 3 対格標識の現れ方

$\phi$	$\phi/o$	$\phi/o/ba$	o	ba	ba/a	合計
15	5	1	4	32	1	58

上述のように先行研究では、対格名詞に後続して「いわゆる体言を強調する場合には『ゴド・

<sup>7</sup> ただし (8) のハに相当する経験者名詞は [a] で終わっており、この方言にはおそらく母音の長短の区別がないため、実は助詞 [a] が後続しているが表層ではわからない可能性もある。

トバ・バ』が現れる」(平山ほか 2003: 34)と報告されている。これに加えて、対格名詞の後に [o] が後続しうる例が9例あった。これも [ŋa] と同様、最近になってからの共通語からの流用であろう。

### 3.1 [ba] と無標識の分布

[ba] と無標識はどちらでも容認可能であることが多いと考えられるが、今回得られたデータからは、有生性によって使い分けられていることが推測される。表4では、表3のデータが有生性によって分けて示されている。この表から見て取れるように、大まかには、無生の対格名詞には無標識、有生の対格名詞には [ba] が後続することが多い。

表4 対格標識と有生性

	ϕ	ϕ/o	ϕ/o/ba	o	ba	ba/a	合計
有生	1	3	0	3	<b>22</b>	0	31
無生	<b>14</b>	2	1	1	10	1	27
	15	5	1	4	32	1	58

これをよく表しているのは、(10) と (11) の対比である。(10) の [inu] "犬" は有生で [ba] が後続しており、(11) の [sodo] "外" は無生で無標識になっている。

(10) na **inu=ba** midea-ttatte sigi danda ga [34]  
お前 犬=ba 見ている-が 好きなのだ か

(11) na nagama=do ide **sodo=ϕ** midea ndaga [35]  
お前 仲間=と いて 外 見ている のか

相対的な有生性の階層によって [ba] が後続するかどうかが決まることがあり得るが、今回の調査からはそのような結果は導くことができない。例えば (12) と (13) の節を構成する項は「私」と「お前」で、主格と対格が入れ替わっている。「私」のほうが「お前」よりも有生性の階層が高いがどちらが対格になっても [ba] が後続しているため、有生性の相対的な高さとは関連しないようだ。

(12) wa: **na=ba** midea [27]  
私 お前=ba 見ている

(13) ome **wai=ba** midea-ttatte doŋita do [46]  
お前 私=ba 見ている-が どうした か

無生名詞でも、いわゆる主題化の操作をされて文頭の位置に来ると [ba] が後続することがあるようだ ((14) 参照)。同様の環境では、[a] も使われうる ((9) 参照)。ただしこれも必須ではなく、(15) のように前置された対格名詞が無標で現れることもできる。

(14) kono **kafi=ba** na tabero kore wa taberu-*f*ite [61]  
 この 菓子=**ba** お前 食べる これ 私 食べる-から

(15) **are** taro mina ku<sup>u</sup>te *ç*imat'a no ga [18]  
 あれ 太郎 みんな 食べて しまった の か

まとめると、有生あるいは主題性の高い対格名詞に [ba] が後続しやすく、それ以外は無標識になりやすいと考えられる。これは Comrie (1979)の指摘どおりに説明ができる。有生性や主題性の高い対格名詞は主格と混同されやすく、従って対格であることを明示的に標示したほうがわかりやすい。この方言でもまさにこれに従って [ba] と無標識が使い分けられていると考えられる。

### 3. 2 [o]

[o] に関しても少しだけ触れておきたい。本節の冒頭で述べたとおり、[o] は最近になってからの共通語の流用であると考えられる。その証拠が (16) のような例からもわかる。この例では [warasi] のようなより方言らしい語に [ba]、[kodomo] のようにより共通語らしい語に [o] が後続している。話者の方の判断によれば、[warasi=o] とは言えないらしい。

(16) wa tonari=no {**warasi=ba** / **kodomo=o**} midea [29]  
 私 隣=の {子供=**ba** / 子供=**o**} 見ている

他の [o] が使われている例文はこれほど明確ではないが、使っている単語や言い回し（構文）にどことなく共通語らしさがあるのかもしれない。例文翻訳によるデータ収集の困難さを物語っているように感じたのでここで指摘した。

## 4 情報構造

本節では情報構造について議論する。ここでは、以前に言及されている対象を指示する名詞を主題、疑問詞やその答えを焦点と簡単に考えておく。4.1 節で主題標識について、4.2 節で焦点標識について述べる。

### 4. 1 主題標識

2.2 節で議論したとおり、この方言には、共通語のハとガのような区別はないと考えられ、主題、主格のどちらの名詞にも [a] あるいは無標識が後続する。2.1 節で指摘したとおり、[a] は主格標識 [ŋa] と主題標識 [wa] のどちらかあるいは両方が音変化したものと考えられる。[a] は主に主格を標示するが、例 (9) のように、主題化された対格も表示できるので、[a] を主格標識であると言い切ることはできない。また、(17) のように [a] は全く新規の指示対象を指す名詞にも後続できるので、主題標識であるとも言えない。

(17) ogaci **oto=a** kikeru na: [目 5]  
 おかしい 音=**a** 聞こえる なあ

[a] は主格標識と主題標識の両方の特徴を兼ね備えた標識であると言える。

#### 4.2 焦点標識

この方言には、他の日本語本土諸方言と同様、焦点標識もない。ガが焦点標識のような振り舞いをすることがあるが (Nakagawa 2016; to appear: 4.3.1.4)、2節で議論したとおり、この方言は本来ガに相当する標識も持たないと思われる。主格名詞が疑問詞や質問の答え、対比的であったりしても [ŋa] は必須ではない。下地 (2017) によれば、対比的焦点のときに最も有標になりやすいが、(18) のように対比焦点の場合でも [ŋa] は必須ではない。

(18) wai dɛne                      wai dɛne                      taro: aruide                      itta [主 25]  
私      でない                      私      でない                      太郎 歩いて                      行った

項焦点構文 (項が質問の答えになる文) や対比構文において、主格名詞が焦点化されたり対比されたりする場合、最初の回答では分裂文のほうが現れやすかった<sup>8</sup>。調査ではあえて目的の文にほぼ対応する文が発話されるまで何度も聞き直し、それを報告したが、本来この方言では、項焦点や対比の主格名詞は、分裂文の述語が最も自然な位置なのかもしれない。例えば「花子じゃなくて太郎が倒れていたの」[主29] に対する第1回答は、(19) のように「花子じゃなくて太郎だった」に当たる文だった。

(19) hanako      dɛnakute      taro: datta [主 29]  
花子              でなくて      太郎      だった

一方、対格名詞を焦点化した場合は分裂文でなく普通の他動詞構文で自然に言うことができるようだ。この対比は、類型論的によく指摘される、主語は主題になりやすく、目的語は焦点になりやすい (Lee & Thompson 1976) という傾向を反映していると考えられる。

## 5 おわりに

本稿では、青森県むつ市方言の主格、対格、そして情報構造に関連する名詞標識を報告した。たった2日間にわたる短い調査の報告であるため、自然談話などを用いてより詳しく調べる必要がある。また、近隣の方言との比較も行っていきたい。

さらに、与格標識 [sa] の分布も青森県全域でかなり変異が見られるので興味深い。時間の都合上これに関して調査できなかったのは残念だった。稿を改めて論じることとしたい。

## 参考文献

Comrie, Bernard (1979) Definite and animate direct objects: A natural class. *Linguistica Silesiana* 3: 13-21.

平山輝男ほか編 (2003) 『青森県のことば』東京: 明治書院。

<sup>8</sup> この傾向は、筆者が4年間調査を行っている野辺地町 (下北半島の付け根の東側、陸奥湾に面する) でも同様である。



- 此島正年 (1967) 「下北方言の文法」、九学会連合下北調査委員会『下北: 自然・文化・社会』. 東京: 平凡社.
- 此島正年 (1982) 「青森県の方言」、飯豊毅一ほか編『北海道・東北地方の方言』東京: 国書刊行会.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』東京: ひつじ書房.
- 熊谷滋子 (2018) 「『方言の価値が高まった』という言説を再考する」、静岡大学人文社会科学部『人文論集』68 (2), 93-126.
- Li, Charles N. & Thompson, Sandra A. (1976) *Subject and topic*. NY: Academic Press.
- Nakagawa, Natsuko (2013) *Discourse basis of ergativity and accusativity in spoken Japanese dialects*. MA thesis submitted to SUNY Buffalo.
- Nakagawa, Natsuko (2016) *Information structure in spoken Japanese: Particles, word order, and intonation*. PhD Thesis submitted to Kyoto University.
- Nakagawa, Natsuko (to appear) *Information structure in spoken Japanese: Particles, word order, and intonation*. Berlin: Language Science Press.
- 下地理則 (2017) 「日琉諸語における焦点化と格標示」NINJALコーパスシンポジウム発表資料 (2017/3/9、於国立国語研究所) .
- 下地理則 (2019) 「現代日本共通語 (口語) における主語の格標示と分裂自動詞性」、竹内史郎・下地理則編『日本語の格標示と分裂自動詞性』東京: くろしお出版.